

佐藤信一・正道寺康子著

『源順漢詩文集』

源順は、天曆年間の歌人として名高い。「後撰集」の編纂に従事した梨壺の五人の一人でもある。「うつほ物語」、あるいは「落窪物語」の作者にも比定されている。また、学者でもあり本邦最初の漢和辞書である「倭名類聚鈔」も、順の手になるものである。

そうした閲歴からも知られるように、順は漢詩文に優れていた。ただし菅原道真における「菅家文章」・「菅家後集」や、島田忠臣の「田氏家集」のような自己の詩集を編むことはなかった。その詩文は様々な総集に引用されている。

この「源順漢詩文集」は、源順の詩文を、平安時代以降の詩文集から、出来る限り収集したものである。対象とした作品は、「天徳三年八月十六日鬮詩行事略記」、「扶桑集」、「和漢朗詠集」、「類聚句題抄」、「本朝文粹」、「新撰朗詠集」、「朝野群載」、「作文大体」、「和漢兼作集」、「別本和漢兼作集」、「江談抄」、「擲金抄」、「本朝文集」、「日本詩紀」、「續撰和漢朗詠集」である。これらの中から源順の詩文を抜き出した上で、本文と

して掲出した。また、これらの中から、源順とほぼ同時代のものである「天徳三年八月十六日鬮詩行事略記」、「扶桑集」、「和漢朗詠集」、「類聚句題抄」、「本朝文粹」、「新撰朗詠集」、「朝野群載」、「作文大体」、「和漢兼作集」、「別本和漢兼作集」所載の源順の詩文索引が作成されている。索引は総索引と事項索引とが附されている。事項項目には「人名（日本人名・外国人名・架空人物・その他）」、「地名（日本地名・外国地名）」、「学芸（学問・音楽）」といった項目が並ぶ。この「源順漢詩文集」は、順の詩、ひいては平安期の日本漢文を読む際の手掛かりになるものであろう。

ただ、句の間を句読点でなく空白で示しているのは、解釈を等閑にしていると言われてもしかたがない。

それから、この著作がなるに当たって、正道寺氏の力が何よりも大きかったことを、言い添えておきたい。

（二〇〇三年二月刊 A4判四三七ページ 私家版）